

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 24 日現在

機関番号：30116
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21700640
研究課題名（和文） クラブマネジャー行動研究－特に、マネジャーの影響力とクラブ特性の 関係性について－
研究課題名（英文） Studies on the management behavior at the managerial level in Comprehensive community sports club. -The Relationship between an influence of club manager and organizational characteristics on Comprehensive community sports club-
研究代表者 村田 真一（MURATA SHINICHI） 札幌国際大学・スポーツ人間学部・講師 研究者番号：20435093

研究成果の概要（和文）：本研究は、総合型クラブのマネジメント主課題として目される、クラブマネジャーの行動特性について明らかにすることを目的とした。その主要結果は以下の通りであった。(1) 今日の総合型クラブの発展段階を吟味した結果、5つのクラブタイプに分類することができること。(2) クラブマネジャーの仕事条件は、その殆どが資格を必要としないものの、一般会員に委ねる状況や意図はみられないこと。(3) クラブマネジャーの仕事内容は 10 通りに分類され、その取り組み方は多様であることであった。

研究成果の概要（英文）：This study aim to examine the management-problems of Comprehensive community sports club(CCSC). Furthermore, examine the characteristics of the tasks at the managerial level in CCSC. As a result of this analysis, the main findings are as follows: (1) The validity of seven dimensions of CCSC properties were confirmed: They were autonomy, solidarity, ideal share, voluntary resources, business development, networking, and sphere of daily existence, respectively. Then, as a result of cluster analysis, CCSCs were classified into five clusters (club groups): ideal typed club, developing typed club, basic typed club, trans regional community typed club, and undeveloped typed club. (2) Nearly all the club managers do not require a license, however they do not entrust their tasks to a general member of the staff. (3) A club manager's task contents may be classified into ten categories, The task characteristic varies according to the club manager.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ科学

キーワード：クラブマネジャー・総合型地域スポーツクラブ・スポーツ経営

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の最大関心事は、総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）の組織特性とクラブマネジャー（以下、マネジャー）行

動の関係性を定量調査、且つ記述・解釈的分析により明らかにすることであった。

マネジャーを主な研究対象に据える理由は、総合型クラブが極度なヒエラルキーに従

うことのないヒューマニズムな組織性格を有するといった、その目標や対象の問題から、個人を組織の“基盤”として捉えるからである。また、マネジャーのリーダー行動に焦点をあてるものの、その方法は多元的な尺度、且つ解釈的分析を導入することで、より実践性の高い理論産出に貢献するものと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、①今日の総合型クラブの組織特性について、クラブリアリティに基づいた規範論的分析視点の提起・分析から、総合型クラブを類型化し、今日の事業・組織型クラブとして総合型クラブのマネジメント課題を把握すること。

そして、総合型クラブの組織特性に影響を与えるとされるクラブマネジャーの行動論について、②まずは、現在のクラブマネジャー（制度）が、どのような社会的布置を形成しているかについて整理し、次いで、その専門職の内実とされる「専門職性」の中身について社会福祉研究の理論基盤を援用、検証しながらクラブマネジャー専門職性の観点を明らかにする。さらに、③クラブマネジャーの経営行動について、彼（女）らの仕事内容やその取り組み方を仕事特性と捉えながら本人の記述をたよりに明かし、さらには、その実態と総合型クラブの基礎理論とを比較することで総合型クラブの組織論的研究の課題について検討していくことが目的とされた。

## 3. 研究の方法

3つの研究目的に応じて方法は異なるが、第一の総合型クラブの組織特性に関する調査については、質問紙調査法から統計分析を試みた。第二のクラブマネジャーの専門職性に関する調査については、文献研究法に従った。第三のクラブマネジャーの仕事特性に関する調査については、日誌法に従い明らかにした。

## 4. 研究成果

①「総合型地域スポーツクラブ特性」に関する研究（2009年度～2010年度）

### 1) 研究目的

これまでの総合型クラブ研究では、クラブ設立形態や、クラブ設立母体などの分析視点を援用したものが多々見られていた。しかしながら、それらはクラブ活動・運営の静態的な側面を捉えたものであり、クラブ活動・運営の動態的な側面、いうなれば「クラブリアリティ」に基づいた視点を必ずしも包含しているとは言い難い状況にあった。そこで本研

究では、こうしたクラブリアリティに基づいて、「総合型クラブ特性」の因子構造について把握するとともに、総合型クラブの類型化を行うことを目的とした。

### 2) 研究方法

まず、クラブリアリティに基づいた分類視点を仮説的構成概念として提起・定立した（「総合型クラブ特性」と呼ぶ）。これが、つまるところ、総合型クラブの組織有効性そのステップについては、まず「総合型クラブ特性」尺度作成のため、総合型クラブに関する先行研究や理論書、または市民社会論、非営利組織論に関する書籍等を多用し、文献演繹的方法により総合型クラブの経営組織的特徴に関するワーディングを抽出した（のべ446ワーディング）。次に、のべ446ワーディングを変則的KJ法により7次元に集約し、それぞれに下位尺度項目を設けた。その結果、「自律性（メンバー自身の主体性と、それに基づいた計画的クラブ運営の内容）」7項目、「連帯性（メンバー同士の連帯・協働を具体化するための内容）」6項目、「理念（理念の標榜・共有と、スポーツ振興に止まらない理念の内容）」6項目、「自主資源（クラブ運営におけるクラブ内での資源調達・創造に関する内容）」8項目、「事業性（クラブ運営の中核となる事業活動の健全性に関する内容）」7項目、「ネットワーク（関連組織・集団との連携体制に関する内容）」7項目、「日常生活圏（校区を重視したクラブ運営と校区住民からの見方を捉えた内容）」4項目、という7次元45項目の仮説的構成概念を定立した。次いで、質問紙調査法（後詳）により5件法で求めた回答に対し主成分分析を施し、仮説的構成概念の信頼性・妥当性を検証した。具体的には、Cronbachの信頼性分析と併せて、主成分得点を算出した。その結果、7次元全てにおいて、第1主成分に各次元の下位項目が高い負荷量（絶対値.50以上）を示しており、各次元の一元構造が確認された。各次元の $\alpha$ 係数は.67以上の数値を示しており、各次元の信頼性が確認された。さいごに、検証された7次元の側面バランスを以後の検討材料とするために、7つの主成分得点を用いて、word法によるクラスター分析を実施し、総合型クラブを類型化した。

質問紙調査のデザインについては、2009年3月から5月にかけて実施された。調査対象クラブは、全国の1,307の総合型クラブであり、回収サンプル数は597（回収率47.5%）であった。

### 3) 研究結果

「総合型クラブ特性」に基づいてクラブを分類した結果、5群に分けられた（図1参照）。

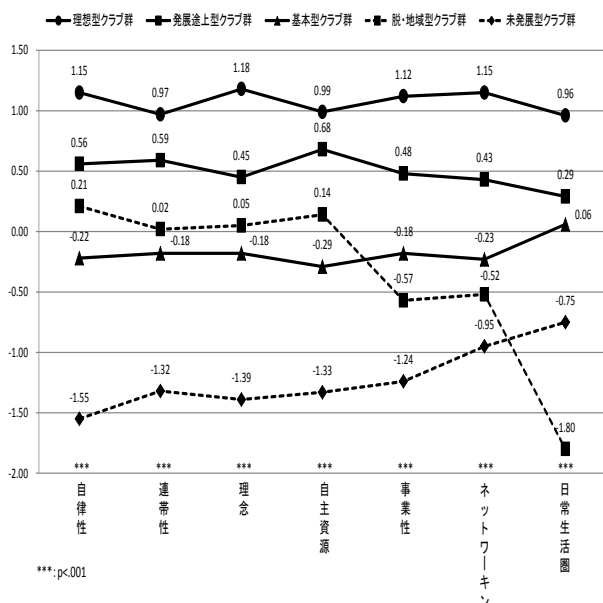


図1 「総合型クラブ特性」のクラブタイプ別比較

1つは、7次元全てにおいて最も高い機能をもつクラブ群である特徴から、「理想型クラブ群」と命名した。2つ目は7次元全てにおいて、ある程度高い機能をもつクラブ群である特徴から、「発展途上型クラブ群」と命名した。3つ目はほとんどの次元において、平均的な機能をもつクラブ群である特徴から、「基本型クラブ群」と命名した。4つ目は、特に「日常生活圏」における機能が極端に低い特徴から、「脱・地域型クラブ群」と命名した。さいごに5つ目は、全てにおいて低い機能を示しており、基準とされる総合型クラブ特性とは異質な観点から営まれているクラブ群とされる特徴から、「未発展型クラブ群」と命名された。

本課題では、総合型クラブの類型化作業において規範的言説に伴った「総合型クラブ特性」を基準点とみなしている。そこで、今日既設されている総合型クラブの中で当初のねらいを達成しているクラブ（「積極型クラブ群」）は19.4%に止まっている現状も明らかとなった。

次に、各総合型クラブ群間が経営条件にどのように関連しているかについて、特徴的な結果を示す。

まず、「設立年（期間）」や「総会員数」、「補助金の有無」について有意な相関は認められなかった。また「範域設定」については、脱・地域クラブ群の影響により有意な相関が認められるものの、理想型クラブ群、発展途上型クラブ群、基本型クラブ群との比較においては顕著な傾向の違いは見受けられない。

一方で、「運営委員会の開催の程度」「運営参加の必要性」そして「運営参加の工夫」については、それぞれ有意な相関が認められた。

これらの結果から導かれる課題は、総合型

クラブ群間の差異に組織の静態的条件（設立年、会員数、補助金の有無）は影響を及ぼさないものの、運営委員会の開催や運営参加の必要性といったメンバーの相互作用の集積に関する動態的条件に大きく影響を及ぼしていることの実事である。つまり、総合型クラブのマネジメント課題として、外的な条件や制度といったコンテキスト要因と組織成果との関連性は無関係と推察され、一方で流動的・動態的な事実、つまり会員同士の相互作用様式や或いは外的制度についても、それへの共有化・意味づけの違いによって組織の有効性に影響を及ぼすものと考えられる。ここに人間重視・交流型組織としての総合型クラブが看取され、そのコントロールセンターとしてクラブマネジャーが注視されるものと考えられる。しかしながら、因果関係について必ずしも明らかになっているわけではないことが今後の研究課題とされる。

## ②「クラブマネジャーの専門職性」に関する研究（2010年度～2011年度）

### 1) 研究目的

今日、クラブマネジャーについては実践現場においても機能性を見出されており、制度的にも財日本体育協会の新資格制度に則りながら運用が図られている。そしてクラブマネジャーと言えば、少なからず役職・確たるポジションといったニュアンスが窺え、その点において、機能と構造の問題を絡ませながら様々な問題が存在している。ここでは機能と構造について、前者については実践現場における捉え方であり、後者についてはより良い実践を下支えするための制度・政策的課題としておこう。本研究は、以上2点を包含しつつも、特に機能的課題に関心を寄せながら「専門職」というキーワードからクラブマネジャーについて考察したい。

さて、「現在において地域スポーツという領域は、市民生活にとって大きなドメインを獲得し得ていなく、新たなドメインを拓く機能が期待される」と言われている。これは、先行研究で説かれる「スポーツ界が正当性を確保するためには、専門職の創出も含め、いかにその界全体として高度に自律できるか、他の界に対して相対的自律性を獲得するかが問題となる」との指摘と通底をなす。つまり、専門職という視点からクラブマネジャーを議論することは、彼（女）ら自身の存在意義を問うことは勿論のこと、社会的布置を図る上でも重要な示唆を呈示する可能性が窺える。

### 2) 研究方法

本研究は文献研究という形式に従う。特に、社会福祉学研究（社会福祉専門職論）の文献に拠りながら考察した。

### 3) 研究結果

#### (i) 専門職としてのクラブマネジャー制度についての論議を整理

専門職としてクラブマネジャーが必要であるとの意見については、必ずしも明確な根拠がある訳ではない。しかしながら松尾(2002)は、【ボランティア専門職】という対極を据えつつ指導者システムについて考察した際、「スポーツ指導や運営はボランティアで行うものだ、といったコード化された規範が供給者側である指導者にも、需要者側である愛好者や選手にも持たれてきたことが問題である」と指摘し、ボランティア・グループとボランティア・アソシエーションの誤診と題して、「より責任ある専門的なサービスを展開しようとした場合、専門的知識や技能を前提としたプロフェッショナリズムとの協働が必要となる」との見解を示している。これは、総合型クラブが運動体だけでなくスポーツ経営体としての事業体として位置づくことを踏まえれば重要な視点となる。また、少なからずもプロフェッショナルを必要とする理由について田尾(2004)は、「利他的な、いわゆるアマチュア的な心性が欠かせられないということがあるが、人に対する以上、その人の尊厳への最大限の配慮も欠かせられない。これには責任が伴わなければならない」と説き、またそれ以上に、「人間というサービス対象が、以前に考えられていた以上に複雑であること」を挙げている。

では一方で、専門職の導入に懸念する意見の原因は何かと言うと、やはり総合型クラブの組織特性とされるボランティアな心性への抵触にある。まずは、専門職に備わる一つの属性となる資格化が過度に強調されすぎると、資格がないと指導、経営ができないといった資格偏重主義に陥る危険性があるだろうし、そこから「排除の論理」までも産み出しかねない。また、総合型クラブは、当該クラブの独自性や当該地域独特の固有性というものを背景とした「身の丈にあったクラブづくり」という唯一無二なプロセス志向や経験知が大切にされるのだが、そこに理論知や普遍知は沿わないとの考えもあるのではないか。

以上の両見解からは、マネジャーの専門職としての機能(センター機能)とボランティア性との拮抗関係について逡巡せざるを得ない状況が見て取れる。だがそれを解消する見方は、専門職観の転換にあるのではなからうか。つまり専門職性を、制度的で過度な科学的根拠に求めるのではなく、ある種、柔軟で変更可能な知として捉える必要がある。

#### (ii) クラブマネジャーの専門職性について検討する。

専門職性を、柔軟な知として捉える認識と

して、「実践的専門性」が挙げられる。この特色は対象の総合化にあるとされ、生活全体を見渡し、総合的視野から実践を行うクラブマネジャーは、この実践的専門化を歩むのであって、それに対して「専門職性」がないかのごとき批判がなされるのは、理論的専門化からの限られた専門職性の見方であると考えられる。併せて、ショーンが説く「反省的実践家」も参照可能である。それは、「現代社会の抱える諸課題は複雑かつ不確実、独自の価値が葛藤する機会が多いため、厳密に細分化された専門知識と技術の適用だけでは問題解決がなされない(秋田 2007)」ことから、専門的知識や科学的技術を合理的に適用するだけの専門家像から、さらに問題認識して対処可能なデザインへと変更していく専門家像を待望してのことである。つまり、専門職性を「活動過程における知と省察それ自体にあるとする考え方」とし、思考と活動、理論と実践という二項対立を克服した専門家モデル」として再定義する必要がある。

#### (iii) クラブマネジャーに沿う新たな専門職性の提起

専門職観の転換を図りつつクラブマネジャーの専門職性を見出すとすれば、以下の観点を導くことが出来る。理論的専門職性とするⅠ理論知、Ⅱ代替可能な技術、Ⅲ価値性、Ⅳ自律性、Ⅴ自己研鑽(継続性)、Ⅵ責任性、そして実践的専門職性とするⅦ協働性、Ⅷ経験知、Ⅸ代替不能な技術・経験知)。

理論的専門職性と実践的専門職性を時と場合によって使い分けることが肝要である。加藤(2007)は社会福祉専門職にとって、「臨床知と科学知の融合を説きつつも、重要なことは『基本技』を持つことであり、そのうえでマルチプルな展開が生きてくるのであり、少なくともダブルの専門性に関わりながら、人間と社会に対する洞察を獲得できる(筆者要約)」と指摘する。この見解はクラブマネジャーにおいても同様とされる。

#### ③「クラブマネジャーの仕事特性」に関する研究(2012年度)

##### 1) 研究目的

これまでもクラブマネジャーの存在意義や仕事内容については、関連書籍や論稿等で規範的に説かれている。但し、ここに改めて問題提起したいことは、その多くが限られた経験的事実と明らかな公理からの一般化であって、事実の観察・記述や分類に基づいたものではないことである。つまり、「一体、クラブマネジャーは日頃何をしているのか」という素朴な疑問については手付かずであった。これに関連する内容として、日本体育協会によるマネジメント資格制度がある。本資格制度は、クラブマネジャーに対する社会

的認知度の向上や許容について、一定の成果を得ているとみてとれなくもないが、批判的な見解が無くもない。八代（2006）は、日本体育協会が提起するマネジメント資格の養成テキスト内容について、総合型クラブならではの基礎理論に基づいたマネジャーの経営技術や方法論の記述が不十分なことを指摘している。これは、クラブマネジャーの在り様や実態を吟味せずに、ごく一般的な経営技術・方法の記述・説明に押し止められていることの警鐘ともいえる。そこで本調査は、クラブマネジャーの仕事内容やその取り組み方を仕事特性と捉え、それについて、当人の記述をたよりに明らかにする事を目的とする。さらには、その実態と総合型クラブの基礎理論とを比較しながら、総合型クラブの組織論的研究の課題について検討していく。

## 2) 研究方法

日誌法によりクラブマネジャー自身が行った仕事について当人が書き留める方式を採用した。そこでまずは、記入フォーマットとされるタスクシートの作成を行った。タスクシートは、クラブマネジャーが行った仕事について、いくつかの観点から当人が整理できるシートである。つまり、いくつかの観点到り従い仕事特性を捉えるのである。その観点は本研究の理論的関心に従う。クラブマネジャーは、1仕事1枚の使用として、1つの仕事が終わる度に、その都度チェック（記述もあり）するようにした。

対象者は、6クラブ8名のマネジャー（2クラブについては2名）とした。対象者選定の際は、一定程度の歴史的経過を伴うクラブ、運営体制の組織化が図られているクラブ、比較的会員数や事業数が充実しているクラブ、の3点に考慮した（2009年度の調査結果より参照した）。なぜなら、今日までの成果とされる、組織型・事業型スポーツクラブを自覚した総合型クラブによるマネジメントタスクの知見を円滑に収集するためである。調査期間は平成24年7月25日～同年8月31日であった。

分析の技法としては、まず、仕事内容の記述について変則的 KJ 法に従い質的内容分類を実施した（後述）。その結果とされるのが仕事内容分類である。そして、全体把握のために、仕事内容分類や仕事に関する諸観点について単純集計を行った。さらに、クラブマネジャー間、或いは仕事内容分類間の差異に関する連関を把握するためにクロス分析を行った。

## 3) 研究結果

対象とされた8名のクラブマネジャーによる仕事内容総数は577であった。そして、577の仕事内容を、オリジナルな KJ 法に従って

分類した。実際の記述内容は、例えば、「〇〇教室の指導」、「イベントの打ち合わせ」、「理事会の議事録作成」というふうに記載されており、つまり「『領域別』による『職能内実』」という形式にて把握することが可能であった。但し、中には「事務処理」「書類作成」というふうに、仕事領域を把握できない内容も含まれていた。従って本研究では、職能的観点に注視した内容分類とした。その結果、「事務処理」「会計」「文書確認」「文書作成」「物品管理」（以上、事務的タスク群）、「1人検討」「会議・議論」（以上、創造的タスク群）、「運営・参加」「指導」「準備・片づけ」（以上、スポーツ事業タスク群）という3群10分類を導出した。さて、仕事内容の10分類についての全体集計を示したものが左表である。ここで留意することは、仕事総数と仕事総時間数の2つの観点にある。総数で占める割合と総時間数で占める割合とでは、1仕事の平均時間の長短により変動がみられる。

表1 仕事内容10分類の概観

仕事内容分類		個数	個数の%	総時間(分)	総時間の%	1回の仕事の平均時間(分)
事務的タスク群	事務処理	149	25.8%	9490	19.6%	63.69
	会計	30	5.2%	2145	4.4%	71.50
	文書確認	28	4.9%	1440	3.0%	51.43
	文書作成	115	19.9%	9860	20.4%	85.74
	物品管理	27	4.7%	1405	2.9%	52.04
創造的タスク群	1人検討	19	3.3%	1905	3.9%	100.26
	会議・議論	113	19.6%	8210	17.0%	72.65
スポーツ事業タスク群	運営・参加	9	1.6%	2990	6.2%	332.22
	指導	65	11.3%	9600	19.8%	147.69
	準備片付け	22	3.8%	1320	2.7%	60.00
合計		577	100.0%	48365	100.0%	83.82

次に、クラブマネジャー間にもみる仕事内容との関連性についてみると、クラブマネジャーが各仕事内容に費やす時間、つまり、仕事の実践スタイルは多種多様であることが分かった。先に10の仕事内容について、3群に分類・把握できることを説明したが、それを見ると、事務的タスク群の割合が高く、スポーツ事業タスク群の割合が低いクラブマネジャーが存在する一方で、スポーツ事業タスク群の割合が高く、事務的タスク群の低いクラブマネジャーも存在した。また、3群ともに一定程度の割合で取り組むクラブマネジャーも確認できた。さらには、創造的タスク群の割合が高いクラブマネジャーについても確認できた。

10の仕事内容について主な結果をみると、「事務処理」では、b氏(34.9%)、e1氏(32.6%)が積極的に行っている一方で、d2(5.2%)氏、f氏(2.9%)は消極的である。「会計」については全般的に低い割合に止まっているが、やはり、b氏(13.0%)、c氏(18.0%)の割合が

高い。「文書確認」についても同様である。「文書作成」については、d1氏(2.2%)とf氏(7.4%)は消極的であるが、他のクラブマネジャーは約4分の1ほど費やしていることが分かる。

「1人検討」については、a氏とe2氏の割合が高いが、とはいっても1割程度である。「会議・議論」は、c氏(22.4%)、d1氏(24.5%)、e2氏(24.3%)の割合が高い。「指導」は、f氏(57.3%)、d2氏(50.7%)、d1氏(33.2%)と続き、50%以上費やすクラブマネジャーもいれば、10%に満たないクラブマネジャーも確認でき、大きな差異のある現象だといえる。

次に、同クラブ内での複数マネジャーの実践スタイルについてみていく。

まずDクラブには、d1氏、d2氏をはじめ複数のクラブマネジャーが存在する。2人の実践スタイルを比較して気づかされた点は、事務的仕事において役割に従って補完し合っているという点である。たとえば、「事務処理」と「文書作成」の割合から、相互補完的な取り組みがうかがえる。また、Dクラブは、現在、プログラム提供型のクラブとして隆盛をなしていることから、指導的タスクにウエイトを置いているとも推察され、そのことが2人の実践スタイルにも現れている。

次にEクラブであるが、当クラブはNPO法人化した体育協会内の一事業組織としてのクラブである。従って、クラブマネジャーのe1氏とe2氏は団体職員である。2人の関係は、e2氏が担当課係長、e1氏が係主任としての立場をとっている。従って、2人とも活動業務とされるスポーツ事業タスク群の割合は低い。これは、現場の指導者に任せているとの役割からである。そして、マネジメント業務ともいえる、事務的タスク群と創造的タスク群を見たときに、2人の役割分化を確認する事が出来た。

今後は、彼らの行動の背景にある意図のレベルから、総合型クラブ組織特性の構造的・過程的変容の解明に迫る必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

①「クラブマネジャーの仕事特性に関する考察」、村田真一、平成25年3月、札幌国際大学紀要第44号 pp115-126、査読無

②「「新しい公共」を担う総合型地域スポーツクラブの課題と展望」、中西純司・行實鉄平・村田真一、平成23年3月、福岡教育大学紀要。第5分冊、芸術・保健体育・家政科編 第60巻 pp77-92、査読無

③「範域設定における総合型地域スポーツクラブの課題」、行實鉄平・村田真一・中西純司、平成22年3月、体育経営管理論集第2巻 pp31-44、査読有

④「総合型地域スポーツクラブにおける財務

分析に関する実証的研究：特に、スポーツ事業と会費設定との関連性に着目して」、中西純司・村田真一・行實鉄平、平成22年3月、福岡県スポーツ医科学研究第8巻、査読無

⑤「総合型地域スポーツクラブ研究の展望(第2報)－“個”を基軸としたスポーツ組織研究の必要性について－」、村田真一、平成22年3月、久留米大学健康・スポーツ科学センター紀要第17巻 pp39-53、査読無

〔学会発表〕(計5件)

①「クラブマネジャーの職務特性に関する一考察(Ⅱ)」、村田真一、日本体育・スポーツ経営学会第36回大会、平成25年3月21日、京都教育大学

②「クラブマネジャーの職務特性に関する一考察」、村田真一、日本体育学会第63回大会、平成24年8月23日、東海大学

③「クラブマネジャー論序章：“専門職”としての行方」、村田真一、日本体育学会第61回大会、平成22年9月8日、中京大学

④「「総合型地域スポーツクラブ特性」に関する研究(Ⅱ)－総合型地域スポーツクラブの範域に焦点をあてて－」、行實鉄平・村田真一・中西純司、日本体育学会第60回大会、平成21年8月26日、広島大学

⑤「「総合型地域スポーツクラブ特性」に関する研究(Ⅰ)－総合型地域スポーツクラブ類型化について－」、村田真一・行實鉄平・中西純司、日本体育学会第60回大会、平成21年8月26日、広島大学

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 真一 (MURATA SHINICHI)

札幌国際大学・スポーツ人間学部・講師

研究者番号：20435093

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし